

〔研究論文〕

新島におけるサーフィンによる観光誘致の経緯

小林勝法、西田亮介、松本秀夫

〔Article〕

The Historical Details of Attracting Tourists to Niijima Island with Surfing

Katsunori KOBAYASHI Ryosuke NISHIDA Hideo MATSUMOTO

Abstract

The surfing boom and the solitary island boom came in succession, and a lot of young people visited Niijima Island in the 1970's. The number of visitors increased rapidly and reached up to 120,000 people in 1981. Recently, the number has been halved with only 60,000 visiting in 2009, but 42% of visiting tourists aim at surfing. The surf spots are big tourist attractions for Niijima Island.

The Japanese Surfing Championship has been held many times on Niijima Island. It is one of eminent surf spots in Japan. However, Surfing did not become active spontaneously there. Shonan Beach and Boso Beach have been the birthplace of the surfing for Japan. Young boys and girls had played in the surf, and they joined with the American soldier who had surfboards in 1960's.

Surfing became active on Niijima Island as a result the cooperation with Tokai Kisen Co.,Ltd. (a steamship line), National Surfing Association and Niijima Tourist Association. Niijima Island is a successful case of the local revitalization through sports.

1. 研究の目的と方法

スポーツによる地域活性化(村おこしなど)の事例は全国にたくさんある。例えば、スキー場やゴルフ場の開設、Jリーグなどのプロ球団の誘致、プロ野球やナショナルチームの合宿誘致、マラソン大会などのスポーツイベント開催などである。サーフィンについても千葉県や和歌山県、福島県南相馬市原町が取り組み始めている。千葉県では、年間185万人ものサーファーが来県するとしてサーフ拠点構想を打ち立てた¹⁾。和歌山県では県内の教育行政機関やPTA団体と連携し、幼児・児童を対象としたプールでのサーフィンスクール事業を2002年から実施し、少年スポーツの振興に取り組んでいる²⁾。そして、南相馬市原町(旧原町市)では民官学が連携して地域経済活性化プランとしてサーフトゥリズムに取り組んでいる³⁾。

新島は伊豆諸島のひとつで、東京から南に約160kmに位置し、観光業と漁業を主な産業とする約23km²の島である(図1)。行政上は隣の式根島(約4km²)と2島で新島村を構成している。人口は3千人あまりである。

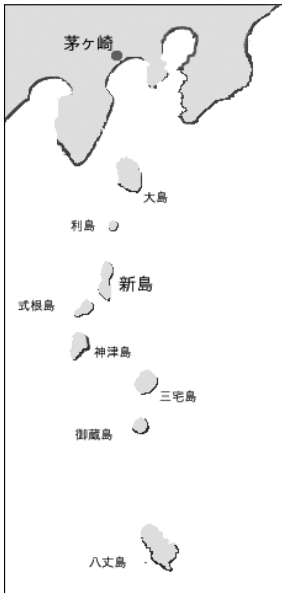


図1 伊豆諸島

現在、新島はサーフィンのメッカとして知られている。毎年多数のサーフィン客を迎えているだけでなく、日本サーフィン連盟(NSA)や日本プロサーフィン連盟(JPSA)などの大きな競技会も開催されている。NSAの日本選手権は1966年から2010年の間に45回開催されている。その45年の歴史の中で、10回以上開催されているのは、新島だけである。また、県別にみると、東京都11回、千葉県10回、静岡県7回、茨城県・福島県・神奈川県各3回、三重県・宮崎県・高知県各2回、愛知県・島根県各1回となっている。

このような日本屈指のサーフ・スポットである理由の第1はサーフィンに適した大きな波が立つことである。波は崩れる時に逆巻き、中に人がくぐるほどの空洞ができる場合がある(図3)。サーファーはこれをチューブと呼んでおり、多くのサーファーはこのチューブの中に入りサーフィンすることにあこがれている



図2 新島空港で観光客を迎えるサーフィン像

が、例えば、湘南では台風が近づいて大きなうねりが発生している時にしかチューブは現れない。ところが、新島では「土管チューブ」と呼ばれる土管ほどの大きなチューブが頻繁に見られる。さらに、サーフ・スポットである島の東側の羽伏浦海岸では綺麗な白砂の海岸が長さ6.5kmにおよんでいる。因みに茅ヶ崎の海岸線も7kmほどであるから、その長さが実感できるであろう。そして、湘南の黒い砂浜とは異なり、白い砂浜で、水も透き通っている。美しい景色を楽しみながらサーフィンができるのも大きな特長である(図4)。



図3 チューブの中のサーフィン (佐藤延男氏提供)



図4 羽伏浦海岸 (榎トラベルロード提供)

伊豆諸島の寒村であった新島が瞬く間に観光スポットへと成長し、サーフィンで知られる島となったことは観光学やスポーツ産業史からみても注目すべき事例であるが、その経緯は当事者の回想として断片的に語られることはあっても学術的に検討されることはなかった。

そこで、本研究では雑誌や評伝、テレビ・ドキュメンタリーなどで語られてきた言説を統計資料や関係者による聞き取りにより検証し、それらを史実として正確に構成した後、新島の発展過程の特徴を検討したい。具体的な検討事項は以下の通りである。

- (1) サーフィンが盛んになる前の新島では波乗りが行われていたか。
- (2) サーフィン誘致には誰がどのように関わったのか。
- (3) どのように来島者が増加し、地域が発展したか。
- (4) サーフィンによる地域活性化の事例としての特徴は何か。

2. サーフィン以前の波乗り

板の上に立ちながら板を操作し波に乗るというサーフインは、日本では1960年前後に神奈川県湘南や千葉県の外房などで同時に始まったというのが定説である。各地の海浜で波乗り遊びをしていた青少年が進駐軍の米兵との交流によりサーフィンを始め、洋雑誌などからサーフィンに関する情報を得て、サーフボードを自作するなどして広まっていった。波乗り遊びの下地があったからこそ、高度な技術のサーフィンが速やかに日本に受容されたと言える。

その波乗り遊びは、おもに板子乗りと呼ばれ、日本各地で1960年頃まで行われていた。漁船の床板を一般的に板子(いたご)と呼ぶが、一日の漁を終え、浜に引き上げられている漁船の板子を外し、それを使って子供たちが波乗りをしていたのである(図5)。板子は長さ1尺5寸、幅1尺、厚さ1寸、つまり、約50cm×33cm×3.3cmほどの杉板で、長さ1.5m～3mのサーフボードよりはるかに小さい。したがって、その上に立って波に乗ることはできないので、現在のボディボード(長さ1mほど)のように板の上に腹這いになって波に乗っていた。



図5 新島博物館に展示してある伝馬船

この板子乗りがいつ頃から行われていたのかは定かではないが、海水浴場が行楽として賑わうようになると海の家などでも板子を貸し出すようになった。日本の最も古い海水浴場の一つである大磯海水浴場(神奈川県、1885年開設)で使われていた板子が大磯町郷土資料館に展示されている(図6)。寄贈者の企業名が描かれている珍しいもので、海水浴場の賑わいと板子乗りが盛んに行われていたことが推察される。

新島でも同様の波乗りが行われており、それは「瀬つかし」(「セつかし」と表記する文献もある)と呼ばれていた。1932年に新島で生まれ、日本石油や新島村役場で勤務し、新島村教育委員会委員長や村会議員を務めた山崎直之は『新島の四方山話と子供の遊び』の中で、8月のお盆の頃に土用波が立つようになると「今日は波がいいから瀬をつかさうか」と言い合い、波乗り遊びをしたことを記している。瀬つかしに使う板子は、伝馬船の踏板(ふんだて)か機械船のさし板を無断借用したと言う⁴⁾。



図6 板子

さて、その瀬つかしの場所であるが、それは新島の西海岸である前浜であった。現在のサーフ・スポットである東海岸の羽伏浦ではない。山崎は「前浜は最高のつかし場であった」と記している。板子を調達する漁船は前浜にあり、集落も西側に多い。1940年生まれで1972年からタクシー会社と民宿を営んでいる梅田重春によると、「瀬つかしは小学校頃までした。羽伏浦では危なくてできなかつた。行くと親にしかられる」と言っている⁵⁾。また、年代は異なるが、1980年代に少年時代を過ごした新島村産業観光課の釜靖昭によれば、「羽伏は波が高く、泳ぐのは危険」と親に言われていたそうである⁶⁾。サーフィンに適した大波は海水浴には危険すぎた。板子乗りにも同様であろう。

そして、この瀬つかしは1960年頃(昭和30年代前半)までされていた。新島村文化財保護審議会副会長の梅田実太郎は雑誌の取材に、「毎年8月15日すぎから9月に入るまでの間に地元で『精霊(しょうろう)波』という大波が来たんです。『セがおったぞ』といいあって、揚げ場の漁船から適当な船板をはがして、海へ出て行きました。」と答えている⁷⁾。浜に引き上げられている漁船は子供たちの遊び場でもあり、板子を拝借するのも容易であったのであろう。しかし、マンガ雑誌やテレビの普及とともに子どもの遊びも変化し、板子を使った波乗りは徐々に衰退し、後に述べるようにサーフィンに取って代わられる。場所も瀬つかしをしていた前浜海岸(島の西側)から東側の羽伏浦海岸へと移っていく。

3. サーフィン誘致の主導者

日本国内におけるサーフィンの普及過程について継続的に研究している小長谷悠紀によると、新島の青年が湘南のヨットハーバーに出稼ぎに行った折り、サーフィンを知り、湘南のサーファーと交流する中で新島の波を彼らに紹介したことがきっかけとなり、湘南からサーファーが新島に來訪したと言う。そして、「1960年代後半に、新島観光協会は東海汽船とともに、『新島でのサーフィン』をアピールし、キャンペーン、大会誘致などに乗り出した。」と記述している⁸⁾。

また、茅ヶ崎出身のプロサーファー吉田憲右(1977年生)は、新島の観光開発は東海汽船の尾上浩彦副社長によるところが大きいとして、「羽伏浦に押し寄せる波を見た尾上副社長はサーフィン・スポットに最適、と判断し、本腰で、新島にサーフィンを普及させようとした。」と記述している⁹⁾。

しかし、これらの記述には根拠が示されていないし、吉田に関しては吉田が生まれる前のことについて述べている。そこで、当事者である新島観光協会と東海汽船、日本サーフィン連盟とその関係者がどのように関わったかについて、文献や聞き取り調査から検証する。

(1) 新島観光協会

新島でのサーフィンの普及に貢献し、2011年2月まで新島村議会議員であり、新島商工会会頭を務める大沼登良夫(1950年生)によると「サーフィン誘致は観光協会長の発案であり、会長の友人である日向某が来島し、サーフィンを勧められたことがきっかけである」という¹⁰⁾。

当時の観光協会長は飯塚周蔵であった。飯塚は1974年に逝去していることから、今となっては彼を詳しく知る者が少ない。新島観光協会に尋ねても当時のことを記した資料は入手できなかった。しかし、新島での聞き取り調査で基督教会の牧師であったことを知り、新島教会小橋孝一牧師から資料^{11)~13)}の提供を受けることができた。そして、それらから次のようなことを知ることができた。

飯塚は1896年に秋田に生まれ、水泳の練習のために新島に移り住んだという。理髪師としてア

メロカ行きの船に乗り込み、港から泳いでアメリカに密入国するつもりだったとのことである。しかし、新島で教会牧師と出会い、キリスト教に入信し、熱心な信者となった飯塚は、1926年に信徒伝道者として新島教会に就任して以来、40年あまりにわたって新島教会の牧師を務めている。布教活動は精力的で、村会議員の半数が信者で占められたこともあるという。そして、新島だけに止まらず、式根島や神津島、三宅島、利島まで訪れている。理髪業を営みながら、新島でただ一人の写真家としても新島の発展に貢献した飯塚は1964年に新島観光協会の初代・会長になっている。そして、1970年の全日本サーフィン選手権や1972年の世界選手権を開催した後、1974年に逝去した。

新島への移住理由や密航の願望など、にわかには信じがたい話である。そして、理髪業、写真家と教会牧師、観光協会長などの組み合わせも奇異に見える。しかし、教会関係の資料を読んでいると、スケールの大きい人物であったことがうかがえる。自宅の写真撮影スタジオを教会の礼拝所として使っていたのを1967年には敷地200坪の礼拝堂を建築するまでに発展させている。青年期の願望や行動、教会牧師としての功績などもそのスケールの大きさ故と考えれば納得がいく。その発想力や行動力を持ってすれば、当時の日本ではあまり知られていなかったサーフィンを誘致し、新島を発展させようとしたとしても不思議ではない。また、村会議員の大半が信者であることも彼の行動を助けたであろう。

余談ではあるが、ハワイで先住民によって行われていたサーフィンが「享乐的すぎる」として基督教の宣教師によって19世紀に禁止された。そのサーフィンが昭和の日本で地域活性化として牧師によって普及されたとは妙な巡り合わせである。

その飯塚に観光資源としてサーフィンを勧めたのが、日向某という老人であると大沼登良夫は言う。しかし、正確な姓名と人物像の詳細や飯塚との関係は詳しくは知らないとのことであった¹⁰⁾。大沼は雑誌のインタビューに「日向さんはハワイには何回も行って、ハワイではサーフィングというスポーツが流行っているのを知っていた。そして羽伏浦の波がサーフィンに適していることを発見したんだ。このスポーツを新島に取り入れることができるなら、新島の観光資源にもなると思って、さっそく観光協会に話をしたらいい。」と答えている¹⁴⁾。

そして、その記事を書いた森下茂男は取材を進め、新島観光協会や東海汽船でも日向について知る者がいないこと、日向は七島戦友会の役員をしていて薬品関係の容器などを製造する会社を持ち渋谷に住んでいたこと、湘南のサーファーに羽伏浦でサーフィンができるかどうか実地調査を頼んだことなどを記している。

日向について、筆者らも新島での聞き取り調査を進めたが、本人はおろか七島戦友会の存在すら確認できなかった。また、日向に依頼されたサーファーの消息も確認できなかった。

(2) 東海汽船

東海汽船は1963年に新島での乗合バスの営業を開始し、新島ロッジを開業するなど、新島への積極的誘致を行っていた¹⁵⁾。後に触れるが、離島ブームの始めの頃である。

前述したように、プロサーファーの吉田憲右は、新島の観光開発は東海汽船の尾上浩彦副社長によるところが大きいとして、「羽伏浦に押し寄せる波を見た尾上副社長はサーフィン・スポットに最適、と判断し、本腰で、新島にサーフィンを普及させようとした。」と記述している⁹⁾。

『日本紳士録』によると、尾上浩彦は、日本興業銀行から日本精工取締役、リコー専務を経て、1966年に東海汽船副社長となった¹⁶⁾。尾上は1974年に社長、1984年に会長と長く東海汽船を率い、1990年に病没している。享年76歳であった¹⁷⁾。日本旅客船協会会長や観光会議所代表世話人も務

め、亡くなる前の1989年には勲三等旭日中綬章を受けている¹⁸⁾。離島ブームに乗り、会社を成長させ、業界でも活躍されたことがうかがい知れる。

東海汽船に尋ねたところ、尾上を詳しく知る社員や退職者は存命していないとのことであった。旅客課長の宮田茂樹は筆者らのインタビューに答えて、「バイタリティのある方」のようだったと語っている¹⁹⁾。

尾上の他に、東海汽船関係で重要な役割をしたのは、営業をしていた楠城克己である。後述するようにサーフィン大会の後援などの実務を担当していたようであるが、詳しいことは調査できなかった。日本サーフィン連盟発行の『サーフィンオフィシャルハンドブック』には、1986年時点で、楠城が日本サーフィン連盟の理事を務めていることが記されている²⁰⁾。日本サーフィン連盟に問い合わせたところ、1984年に相談役、1985年から1990年まで理事を務めているとの回答が得られた²¹⁾。

(3) 日本サーフィン連盟関係者

日本サーフィン連盟は1965年に発足しているが、その発足の中心メンバーであり、日本で初めてサーフボードを制作・販売した高橋太郎は東海汽船の宣伝企画をやっている会社から1965年の夏に「伊豆諸島の中でサーフィンに適した場所を教えてほしい」と頼まれ、航空写真に写った波の様子から新島の羽伏浦を指し示したという。そして、主宰するダックス・サーフィングクラブのメンバー5人くらいとともに新島視察に訪れ、当時船着き場近くにあった東海ロッジに1週間くらい逗留しながら、サーフィンをしたという^{22)~23)}。

そして、このことを持って「新島で初めてサーフィンをしたのは高橋太郎である」²⁴⁾と伝えられているが、高橋の証言によると「新島に着いたときに前浜でフジサーフボードを持った一人の青年を目撃した。サーフィンをしている姿は見えていない。時間がなかったせいもあるが、なぜか声をかけなかった。」とのことであった。フジサーフボードとは富士工機製作所が大量生産していたサーフボードで、高橋のライバル会社の製品である。それだけに印象が強かったのだろう。「はっきりと記憶に残っている」と高橋は証言している。しかし、このサーフボードを持った青年が誰であるか、そもそも地元の青年であるかどうかとも現在のところ不明であるが、この青年が高橋よりも前にサーフィンをしていた可能性は否定できないだろう。

(4) 新島のサーファー

高橋太郎よりも先に新島でサーフィンをしていたとしたら、それは誰であろうか。前述したように、小長谷悠紀は、「新島の青年が湘南のヨットハーバーに出稼ぎに行った折り、サーフィンを知り、湘南のサーファーと交流する中で新島の波を彼らに紹介した」と記している⁸⁾。はたして、この青年とは誰であろうか。

新島で民宿富八を営む富田昇は雑誌のインタビューで、「新島で初めてサーフィンした人は、誰ですか」の問いに「たぶん、植松清さんって人」と答えている²⁵⁾。また、別の雑誌では、「すでに上松清、宮川しげる、青沼きろくなどが、波乗りをやっていたそうだと記されている¹⁴⁾。この「上松」は、「植松」の誤植であると思われる。これらのことから、植松清が新島の黎明期のサーファーの一人であると推察される。植松に関する雑誌記事などは少ないため詳細が分からなかったが、幸い本人にインタビューすることができた。その結果をまとめると以下ようになる²⁶⁾。

植松は、建設会社の息子として1947年に生まれ、幼少期から前浜での瀬つかしをはじめ海の遊

びに広く親しんだ。島の沖合を通過したヨットの姿を目にして以来、ヨットに惹かれ、ヨットを自作したこともあった。植松は17歳のとき、ローマオリンピック代表の岡本豊が横浜で経営する岡本造船所でアルバイトとして働きながら、ヨット競技に励んでいた。1964年のある日、横浜ベースの米兵が岡本造船の場所を借りて、サーフボードの製造の仕方を教えていた。そのときに材料や作り方をならい、自分も材料を分けてもらって、サーフボードを自作したという。

植松は東京オリンピック開催の為に江ノ島に建てられた岡本造船に職場を移り、東京オリンピックのアメリカチームの船艇メンテナンスをしながら、一層ヨット競技に熱中していく。並行して、暇を見ては江ノ島周辺で自作サーフボードでサーフィンを楽しんだ。江ノ島周辺の鶴沼や鎌倉でサーフィンを楽しんでいた「シャークス」や「鶴沼サーフクラブ」といった若者たちのグループと出会い親交を深めていく。

植松は、新島にもサーフボードを持ち帰り、前浜でサーフィンををはじめ、後には、羽伏浦でもサーフィンを楽しんでいる。最初の頃は植松の自作ボードを友人たちも乗っていたが、徐々に植松が彼らのボードも作るようになった。その後、鎌倉でサーフボードの工房を開いていた出川三千男らと一緒に2シーズン程度サーフショップを開き30本程度のサーフボードを作成したという。

湘南のサーフィングクラブの若者たちと親交があったことから、植松が湘南にいるときは彼らの家に宿泊し、新島にくるときは植松の家に滞在するような関係になった。植松が語るところによれば、当時湘南でサーフィンをやっていたもので、新島に來たことがないものはなかったという。サーフィン雑誌の『NALU』（2002年、No31）に掲載された「1968年鶴沼波乗り青年団の冒険」には、当時の模様が描かれ、植松家の三輪トラックで羽伏浦に向かう写真が掲載されている²⁷⁾。図7は当時の写真である。

また、鶴沼サーフクラブの遠藤大六は、1968年に開催された第3回全日本サーフィン選手権大会のプログラムに「電信柱とドラムカン」と題して新島の波の大きさとサーフィンを紹介している²⁸⁾。

このように、1960年代半ばから植松を中心として新島でもサーフィンが行われていた。植松は新島サーフィングクラブを創設するなど、サーフィンの普及に貢献している。そして、植松が湘南のサーファーたちと親交をもつようになったことで、湘南のサーファーたちが新島に足しげく通うようになり、その後のサーフィン大会誘致へとつながっていったと推察される。



図7 1970年代の新島のサーファー（植松清氏提供）

4. サーフィン誘致後の発展

これまで見てきたようなサーフィン誘致がその後どのように発展したのかを観光の面から確認しよう。

(1) 高度経済成長と旅行ブーム

高度経済成長期(1955年～1973年)には、交通網が整備され、経済的に余裕ができた庶民の間で旅行ブームが起きた。1956年に東海道本線(東京～大阪間)が電化され、1958年に関門国道トンネル開通、1964年に東海道新幹線開業、1969年に東名高速道路全線開通、1972年に山陽新幹線開業、1973年に関越自動車道開通と現在でも幹線として利用されている道路鉄道網がこの時期に相次い

で完成している。

宿泊の面では、1960年頃から民宿がブームになり、多くの観光客を受け入れた。1961年度からは旧厚生省により国民休暇村が国立公園および国定公園内に整備され、低廉な宿泊施設と各種の野外レクリエーション施設が大衆を受け入れた。物見遊山からレジャー活動へと旅行の目的が多様化したのである。1963年には(株)日本交通公社(現在のJTB、世界最大の旅行会社)が設立、1965年に国鉄が「みどりの窓口」開設するなど観光業も発展し、交通インフラも観光サービスも整備された。

(2) 離島ブームと新島

このような中で、1960年代後半から「離島ブーム」がわき起こった。1924(大正13)年4月創刊の旅行月刊誌『旅』(日本旅行文化協会発行、のちに日本交通公社発行)では1968年6月号で「船旅と離島の旅情」、そして、1978年6月号では「島へ・利尻から沖縄まで」と題する特集を組んでいる。離島のグラビアや紀行文、旅行案内などが掲載されており、読者の旅情を誘っている。なお、前号では式根島が取り上げられている。また、実業之日本社発行のブルー・ガイドブックス・シリーズでは、それまでは『伊豆』(渡辺正臣著)の中で伊豆七島が紹介されていたに過ぎなかったが、1968年には『伊豆七島』(渡辺正臣著)として独立している^{29)~30)}。そして、同じ年にはブルー・ガイド・カラー新書シリーズの1冊として、直木賞作家の城山三郎が『離島・伊豆七島』を著している³¹⁾。このような観光情報が整ったこともあって、伊豆諸島は関心を集め、大量の観光客が訪れるようになった。

『東海汽船80年のあゆみ』(1970年)によると、「伊豆七島渡島客は急激な上昇を見せた。特に、新島、式根島、神津島の民宿ブームは、訪れる人もまれな数年前と比べてその賑わしはまさに隔世の感があった。」という。同書によれば、同社の観光客輸送員数は1967年に前年比約41万人増加し、約171万人となり、1969年には約212万人にまで増えている¹⁵⁾。

(3) 新島への渡航者と渡航目的

新島の渡航者数の推移を図8に示した。1965年頃から年を追うごとに増え、10年間で7倍近くの約9万人になっている。そして、新島村役場の資料によると、宿泊業者は1969年に102軒(1600名収容)だったが、1981年には245軒と2倍半近くに増えている。この年の8月14日には14,000人が滞在したという記録がある³²⁾。

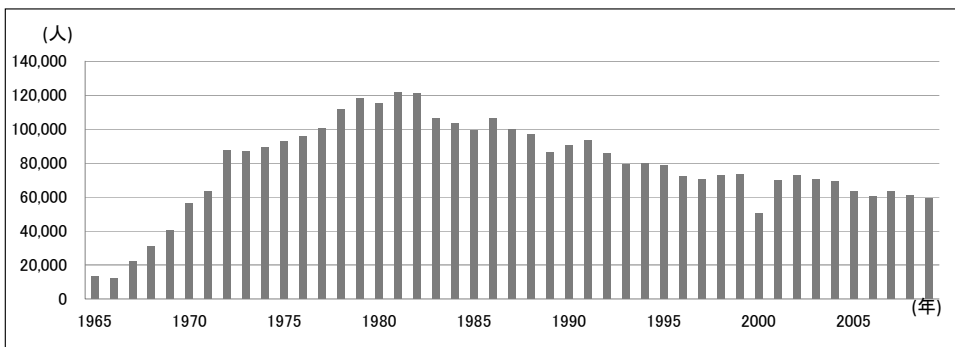


図8 新島への渡航者数

このような急激な変化を1971年8月2日付けの朝日新聞は「島とヤング 新島 ロックとサーフィン レジャー天国に生まれ変わる」との見出しで次のように伝えている。

新島はサーフィンの名所になった。島のサーフビーチ・羽伏浦には、色とりどりのサーフボードをかついだ若者が、連日のようにあふれる。数年前までは人影もまばらだったのに・・・。

そして、スナック、みやげ店、食堂、パチンコ、アーチェリー、喫茶店、ビヤホールなどの観光客相手の商売が出現し、「今年は新しい看板が九十本もできた」と島民の言葉を伝えている。記事の最後は、「来島客はこの2ヶ月間に約5万人と見込んでいる。」と結んでいる。

新島は一気に観光化し、町の様相が変貌した。そして、観光客で溢れるようになった。先の梅田重春(民宿とタクシー会社経営)は「夜になると道ばたにアベックが並んで坐り、数珠つなぎになっていた。宿には窓から出入りするなどで、誰が料金を払って泊まっているのか把握できないほどだった」と述懐している。

その渡航者数は1980年前後をピークにして減少が続き、近年では6万人程度となっている(図8)。2009年に新島商工会が行った実態調査では、新島への来島者は約4万5千人で、そのうち約2万3千人が観光目的であると推定している(仕事が約1万3千人、住民が約1万人)³³⁾。その観光客の目的を見ると、サーフィンが最も多く42%を占め、次いで海水浴の37%である。隣の式根島は海水浴59%、釣り17%、サーフィン0%となっており、サーフィン目的の観光客が新島では圧倒的に多いのがわかる。また、月別の渡航者数では、両島とも7～9月が多いが、新島では4月～5月も多い。これについて、報告書では「4～5月は2000人単位で来島者は多い。サーフィン客と思われる。」と分析している。以上見てきたとおりサーフィンは現在でも新島の最大の観光資源となっており、新島経済に与える影響が大きいことがわかる。

(4) サーフィン競技会の開催

上記の新聞記事は、新島のサーフィンが1971年には一般的に広く知られるようになったことを示している。その新島のサーフィンを一躍有名にしたのが、1970年の全日本サーフィン選手権である。1970年8月24日付けの朝日新聞はベタ記事ではあるが、「白波乗り越えサーフィン 新島で選手権」との見出しで伝えている。記事によると、「全国から集まったサーファーは外人や女性を含む約百人。”日本一のサーフポイント”と参加選手がいう新島の羽伏浦海岸は台風10号の余波もあって波高2.5メートルと絶好。」であったという。なお、1966年に第1回全日本選手権を千葉県鴨川で開催しているので、新島での開催は第5回目となる。

この全日本選手権の前年には、第一回新島杯が、新島観光協会主催、東海汽船後援、日本サーフィン連盟と西武百貨店の協賛により、1969年6月22日～24日に開催されている⁹⁾。これまで見てきた三者、つまり、観光協会と東海汽船、日本サーフィン連盟の三者に加えて、当時サーフボードの販売をしていた百貨店により開催されている。朝日新聞(1969年6月24日付け)の「ニュース・グラフ」という報道写真を並べた紙面において、「しぶきのカーテン 新島のサーフィン」と見出しがついた一枚の写真が掲載されている。そして、その解説には、「新島観光協会が東京の汽船会社やデパートなどとタイアップして、夏の伊豆七島を大いに宣伝しようと実施したもので、・・・」と記されている。

前述した雑誌記事「新島帰帆物語」にも、東海汽船の楠城克己(南条克己と誤植で記載)のコメントとして、「新島の新しいスポーツとして(中略)サーフィンを新島に定着させるために、昭和44年にサーフィングコンテストを催したのです」との記述がある¹⁴⁾。

これらの記事から、新島観光協会と東海汽船がサーフィンによる観光誘致の過程で、全日本選手権開催の為に、前年にサーフィンコンテストの開催を企画したことが推察される。しかし、楠城がすでに死去していることから、誘致の具体的な方法などは不明であり、当時の経緯を知る人々は見当たらなかった。

当時について、日本サーフィン連盟(NSA)の設立時に理事長を務めた坂田道は、『サーフィンザ・オフィシャル・ハンドブック』の「日本のサーフィンの歴史2」において、以下のように記している³⁴⁾。

1970年に入ると、サーフィン人口は5万人にも達した。'70年幕開けの大会はサーフアイランドとして脚光をあびて来た、新島の羽伏浦海岸で行われた。新島でその前年に第1回新島杯が開かれている。羽伏海岸は一年中波が高く、潮の流れが速いので海水浴場としては不向きで、あまり利用されていない海岸であった。新島本村役場、観光協会もこの新しいスポーツに大いに援助を与えてくれた。この村ぐるみの協力で新島本村もサーフィンも共に発展した。NSA設立の主旨である正しいサーフィンの発展という事も考え、従来、千葉、湘南のみでやっていた全日本を地方へ持っていき始めた。

新島での競技会開催は、全日本選手権を日本各地で開催する先駆けとなり、日本サーフィン連盟にとってもエポックメイキングなことであった。さらに、世界選手権を1972年に新島で開催するという大きな飛躍につながっていった。

(5) サーフボードミュージアムの開設

新島村博物館は1998年7月に開館したが、その2階にサーフボードミュージアムが開設されている(図9、図10)。新島の瀬つかしやハワイのサーフィン、日本のサーフィンの歴史がパネルで示され、日本の初期の頃のボードが多数展示されている、日本で唯一の博物館である。新島の観光名所ともなっており、このような形でもサーフィンが観光資源となっている。1960年代に坂田道が自作した木の骨組みにFRP加工を施したサーフボードから始まり、鈴木正や林利夫といった日本サーフボード黎明期の職人の手によるサーフボードが多数展示されている。



図9 新島村博物館



図10 サーフボードミュージアム

5. 本事例の特徴

サーフィンによる地域活性化の事例として検討してきたが、本事例の特徴は以下のようにまとめられる。

(1)サーフィンによる観光誘致は汽船会社と観光協会、サーフィン団体が協力して誘致した。

(2) 離島ブームに合致し、瞬く間に大衆に知名度が向上した。

(3) 競技会誘致によって、サーフィン愛好者に知名度が向上した。

しかし、ブームはしほむのも速く、「ナンパ天国」などの風評被害もあり、急速にブームは終焉を迎えた。ブーム後のサーフィンによる観光振興の取り組みについては、別の機会にゆずりたい。

謝辞：本稿の執筆にあたり、次の方々より資料の提供を受けた。記して感謝したい。小橋孝一・新島教会牧師、北村武・新島村博物館学芸員、佐藤延男・東海大学准教授、東海汽船株式会社、新島村産業観光課、新島村商工会。

付記：本研究は文教大学湘南総合研究所研究助成(2010年度)を受けて行った「湘南地域におけるサーフィン関連産業の歴史と現状」(代表：小林勝法)の研究成果の一部である。

文献

- 1) 毎日新聞千葉県版2003年8月18日付「県がサーフ拠点構想」
- 2) 梅本利樹、和歌山県サーフィン連盟の活動について、第1回サーフィンサイエンス&テクノロジーシンポジウム講演集、pp.48-51、2009年、<http://ceo.pari.go.jp/sst-hp/1st/1st.htm>
- 3) 奥本英樹、海資源を活用した新たな地域活性化プランの探求--原町市サーフトゥリズム構想、福島の進路、(福島経済研究所発行)、278号、pp.25-31、2005年
- 4) 山崎直之、新島の四方山話と子供の遊び、ハイビジネス、pp.93-97、1995年
- 5) 新島村産業観光課の釜靖昭氏の証言。2010年9月22日電子メールによる回答。
- 6) タクシー会社を経営している梅田重春氏の証言。2011年4月4日電話による聞き取り。
- 7) ビーパル話題鍋 この“まな板”こそニッポン古来のサーフボードだ！ 新島で復元された伝統的波乗り遊び、ビーパル、1998年7月号、pp.8-9
- 8) 小長谷悠紀、日本国内におけるサーフィンの普及と地域に対する影響、日本観光研究学会全国大会論文集、17号、pp.193-196、2002年
- 9) 吉田憲右、サーフィン・プレビュー、泉書房、p.15、2001年
- 10) 2010年9月16日に大沼登良夫氏の自宅(新島村)で行った聞き取りによる。
- 11) 旧日本同盟基督教団史編纂委員編、日本同盟基督協曾略史:補遺戦後復興史、ブイツーソリューション、pp.168-169、2007年
- 12) 『信徒の友』1968年9月号、日本基督教団出版局、pp.37-45
- 13) 基督教新聞、256号(1926年8月1日付)
- 14) 森下茂男、新島帰帆物語、サーフィンライフ、第1巻第4号、pp. 52-66、1980年
- 15) 東海汽船株式会社編、東海汽船80年のあゆみ、東海汽船、1970年
- 16) 交詢社出版局編、日本紳士録、第66版、ぎょうせい、1980年
- 17) 日経産業新聞、1990年9月6日付
- 18) 日本経済新聞、1989年11月3日付
- 19) 2010年11月19日に東海汽船本社(東京都港区)で行った聞き取りによる。
- 20) 日本サーフィン連盟、サーフィン ザ・オフィシャル・ハンドブック、1986年
- 21) 2011年4月24日に日本サーフィン連盟副理事長宗像富次郎氏からの電子メールの回答による。
- 22) DVD『日本サーフィン伝説』、ポニーキャニオン、2010年

- 23) 2011年3月21日に高橋太郎氏の自宅(千葉県いすみ市)で行った聞き取りによる。なお、高橋が興したブランドはダックス・サーフボードである。
- 24) 2010年9月17日に新島村博物館で行った聞き取り調査に対する北村武学芸員の回答。
- 25) 國吉博光、新島、サーフトリップジャーナル、第14巻、pp.149-159、2001年
- 26) 2011年10月1日に植松清氏の自宅(新島村)で行った聞き取りによる。
- 27) 山森恵子、1968 鶴沼波乗り青年団の冒険、NALU、第31号、pp.69-76、2002年
- 28) 遠藤大六、電信柱とドラムカン、第3回全国サーフィン選手権大会パンフレット、p.21、1968年
- 29) 渡辺正臣、伊豆(ブルー・ガイドブックス)、実業之日本社、1961年
- 30) 渡辺正臣、伊豆七島(ブルー・ガイドブックス)、実業之日本社、1968年
- 31) 城山三郎[他]、離島・伊豆七島(ブルーガイド)、実業之日本社、1968年
- 32) 新島村産業観光課資料、新島来島者数一覧、2010年
- 33) 新島村商工会、新島村宿泊事業者アンケート実態調査及び来島者分析報告書、2010年
- 34) 坂田道、日本のサーフィンの歴史2、サーフィン ザ・オフィシャル・ハンドブック、p.43、1986年